〈東文研・ASNET共催セミナー〉

国際法と清朝末期のチベット問題

When Western International Law Came: The Sovereignty Dilemma of Tibet in the Doddery Chinese Empire

人類の長い歴史の中で、異なる地域に多種多様な国際体系が存在していた。主権と国際法は西洋の政治概念であり、ヨーロッパの歴史の中で生まれたものである。ヨーロッパの拡張に伴って最終的に今日の国際社会における法的基礎となった。これらの概念が清王朝の末期に東アジアに伝来した結果、東アジアで千年以上存在していた政治実践が、新たなコンテクストにおける正統性の再獲得という困難に直面した。チベット問題もその時に再浮上した。本報告はチベット・中国関係の発展史、特に清朝末期に西洋の国際法が東アジアに伝来した歴史をめぐって、国際体系の変遷という角度からチベットの主権問題に関する論争の分析を試みる。

◆ 日　時：　2017 年 1 月 19 日（木）17:00-18:00

◆ 報告者：　湯岩氏（東京大学東洋文化研究所・訪問研究員）

◆ コメント：　額定其労氏（東京大学東洋文化研究所・准教授）

◆ 会　場：　東京大学　本郷キャンパス内　東洋文化研究所　1F ロビー

※ 報告は英語で行われます。

ASNET

東京大学
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia